

アフロ・ポップの起点となった「ハイライフ」を現代に継承する ガーナ発の新世代バンド＝サントロフィが待望の初来日を実現!

20世紀以降に発展してきたアフリカン・ポップスのルーツを辿っていけば、避けて通ることができないのがガーナで生まれた「ハイライフ」と呼ばれる音楽。もともとは20世紀初頭のイギリス植民地時代に、白人のダンス・パーティ会場から漏れ聞こえてくるブラス・バンド音楽などを現地の人々が模倣することから始まり、やがてスウィング・ジャズやバームワイン音楽、カリブソなどのラテン音楽の要素も取り入れながら独自のものへと発展していった。アフリカ諸国が独立へと向かった1950～60年代初頭には、ハイライフはガーナのみならず西アフリカ一帯で盛んに奏でられるようになり、ロックが台頭してきた時期には、管楽器アンサンブルを中心としたビッグ・バンド編成よりも、少人数のギター・バンド編成が主流に。70年代に入ると、米国のソウルやファンクの要素を取り入れたファンキー・ハイライフが人気を集め、2000年代以降には欧米圏のDJたちによって再発掘されたことで、忘れ去られた名作復刻やレジェンド的な音楽家の復活が進んだ。今回、初来日ツアーを実現させるサントロフィは、ガーナが育んできたハイライフの輝かしい歴史と多様なスタイルを現代に継承し、改めてその魅力をワールドワイドに発信で

きる実力を兼ね備えた新世代のメンバーたちが集まって結成された8人組グループである。リーダー格のエマニエル・オフォリ(ベース)を筆頭に、多くのメンバーはエポ・テイラーやバット・トーマスといった60～70年代のファンキー・ハイライフ全盛期に活躍した偉人たちや、自国の人気ラッパーらのバックを務めてきた経験を持ち、あらゆるグルーブに精通。2020年に欧州のレーベルから発表された彼らの初のアルバム『アレイフ』を聴いてみれば、70年代直系のファンク色が強いスタイル・バンド・スタイル、隣国ナイジェリアでフェラ・クティがハイライフを基に独自発展させたアフロビートを取り入れたものなど…。新旧ハイライフの豊かな歴史を見渡し、それらの遺産を21世紀に引き継いだ「正統後継者」であることがよくわかるだろう。デビュー前からヨーロッパ各地の大型野外フェスなどにも出演し、ライブ・バンドとしても高い評価を得てきた彼らだけに、踊り出さずにはいられないステージとなることは間違いなし。本格的なハイライフ・バンドの来日公演自体がレアでもあり、ぜひその「現代の最高峰」を体感してみたい。音楽評論家 吉本秀純

PROFILE

サントロフィは、歴史あるハイライフをガーナの若い世代に伝えるとともに、世界に発信することを使命とし、結成。ガーナ首都アクラを拠点に、西アフリカ音楽の大きな屋台骨のひとつであるハイライフや、そこから発展したアフロビートをさらに現代化したサウンドが魅力の大所帯若手グループです。

